定年を迎える教授の特別寄稿

講座主任退任にあたり

門倉 光隆

医学部 外科学講座
呼吸器外科学部門
（昭和大学横浜市北部病院長）

本年３月31日をもちまして呼吸器外科学部門講座主任を退任させていただきます。１９８０年（昭和55年）３月に医学部を卒業以来、40年にわたってご指導いただきました諸先生方、ならびに常に横から支えて下さった皆さま、一人ひとりに心から感謝申し上げます。

医療者として昭和大学建学の精神である「至誠一貫」と、故上條秀介先生の信念である「不求一身安」に従い、病院を訪れる方々の信頼や期待に応えられるよう、努力してまいりました。これまで、先輩や同僚から数多くのことを学び、後進の育成や指導に反映できるよう心掛けましたが、優れた医療者をどれだけ育てることができたのか、日々回顧しております。

１９９８年（平成10年）より、「全国に先駆けて大学病院で初めて電子カルテを導入する」とした昭和大学横浜市北部病院の開設準備から、２００１年（平成13年）の開院後４年に亘り、深く関わることができました。２００５年（平成17年）に一旦旗の台へ異動し、講座主任へ昇任ののち、いくつかの学会長や理事長などを拝命し、そこで知り合った先達からも多くを学びました。２０１６年（平成28年）に再び北部病院へ異動し、病院長として今日を迎えました。この間、講座主任でありながら、旗の台から離れて部門全体を統括するという貴重な経験をしました。一週間の中で附属病院間を頻回に移動する目まぐるしさと、それに耐え得る体力の維持や健康管理に配慮し、充実した時間を過ごすことができました。

今後も引き続き、附属病院の運営に関わらせていただきますが、大学全体が「One Showa」となることに加え、病院で働く医師や看護師・薬剤師・臨床検査技師ほか全職員が密に連携し、病院全体が一つのチームとなる「One Hokubu」の理念を掲げ、医療を受ける側と、それを提供する側の両者が、満足度の高いチーム医療を実践し続けたいと考えております。今後ともご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

退任にあたって

瀧本 雅文

医学部 臨床病理診断学講座

昭和大学医学部を１９８１年（昭和56年）に卒業し、田代浩二教授が主宰する第二病理学講座大学院に入学し、東京大学医科学研究所病理で単純ヘルペスウイルス脳炎発症機序についてマウス感染実験の研究で１９８５年（昭和60年）に学位を取得しました。大学院修了後は、外科系の臨床医に進むつもりでした。

卒業の時、指導担任の第一内科高橋昭三教授に相談した際「病理に行くと臨床に戻ってこないひとが多い」と言われましたが、その通りとなってしまいました。当時は学会認定の専門医制度が始まった頃で、病理専門医に合格したことも自信になりましたし、形態学の面白さに魅かれたことと、太田秀一先生をはじめ良き指導者に恵まれていたからです。

その後、１９８７年（昭和62年）に会津中央病院病理科長として２年間赴任し、１９９０年（平成２年）から ウイーン大学免疫研究所に２年留学をさせていただきました。帰国後大学に戻り１９９９年（平成11年）から都立豊島病院病理科長として２年間従事しました。

約８年間は学外で病理診断業務や研究を行いましたが、昭和大学には学生時代を含めると45年間もお世話になりました。一人病理医なども経験し、それなりの苦労もありましたが、それ以上に素晴らしい経験をすることが出来ました。

２０１２年（平成24年）に講座主任教授を拝命してからは、２つの病理学講座、病院病理科と臨床病理学講座の統合、検査業務の外注化、病理専門医の人材不足など難しい問題に直面し、厳しい状況がいまも続いています。教室の先生方には大変つらい思いをさせてしまっており心苦しい限りです。

今後は昭和大学特任教授として新たなスタートをきりますが、病理診断業務、医学教育に微力ではありますが、少しでもお役に立てるように努力してまいります。これまでと同じく、ご支援ならびにご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

定年退職に際して

田中 和生

医学部 微生物学講座

私は１９８１年（昭和56年）に熊本大学医学部を卒業し、二年間の外科研修の後、九州大学の免疫学教室の大学院に入りました。大学院を修了した１９８８年（昭和63年）に、アメリカのボストンにあるハーバード大学ブリガムアンドウィメンズ病院外科の腎臓移植部門に留学しました。

この時代はサイクロスポリンの出現により、腎臓移植をはじめ臓器移植の症例数が飛躍的に増加した頃で、それに伴い合併症、特に移植後の感染症が大きな問題となっておりました。加えて、この時代はエイズも大きな社会問題となった頃でもあり、それに伴う日和見感染症も深刻でした。このような時代のなかで私は臓器移植の研究の目的で留学し、ウイルス感染症に興味を覚えました。

帰国後は二年間ほど外科の臨床に従事し、外科学会認定医を取得後、九州大学のウイルス学教室の助手になり、本格的にサイトメガロウイルス、ＨＩＶなどの研究に取り組むこととなりました。１９９４年（平成６年）には、東海大学医学部の感染症学部門に移り、免疫学、ウイルス学の研究、さらに腸内細菌、腸管感染症に関する研究を行いました。

そしてご縁があり、２００８年（平成20年）には、細菌学、ウイルス学、免疫学を研究領域とする昭和大学微生物学教室に参りました。昭和大学に着任するまでは、免疫学やＳＰＦマウスや無菌マウスを用いた感染実験を中心とした研究を行っておりましたが、研究を継続するためには、感染動物室、マルチカラーフローサイトメトリー、無菌マウス施設などが必要でした。幸いにも、理事長先生をはじめとする大学の皆さまのご尽力、ご支援により、機器、施設を設置して頂くことが出来、最高の研究環境を得ることができました。

最後に、私はこれまでいくつかの大学に勤務して参りましたが、昭和大学は四つの学部、それに富士吉田教育部との連携が素晴らしく、多くの先生のお力添えを得て、素晴らしい環境で働くことが出来ました。昭和大学に深く感謝し、大学の今後の益々のご発展を祈念しております。お世話になりました。

定年退職にあたって

井上 紳

歯学部 全身管理歯科学講座
総合内科学部門
（歯科病院 内科クリニック）

１９８０年（昭和55年）に昭和大学を卒業し、直ちに昭和大学第三内科講座に入局しました。

当時は東京大学の第三内科出身の新谷博一先生が主任教授で、自分は大学院生として不整脈病理を研究するよう命じられました。そのために第二病理学教室（現臨床病理診断学講座）で当時の田代浩二教授のもと、心臓の刺激伝導系の標本作成に従事しました。それだけでなく、藤が丘病院で指導を受ける機会をいただき、大学院生活を充実したものにすることができました。

その後は10名ほどの学位論文の指導に携わりましたが、講師になった卒後15年目あたりから行き詰まりを感じ、１９９５年（平成７年）から２年間アムステルダム大学の心臓病理研究室に留学しました。ヨーロッパでの生活は研究面のみならず人間的にも視野を大いに広げる機会になりました。

帰国後は第三内科（現循環器内科）と東病院で勤務しましたが、２０００年（平成12年）から旧豊洲病院内科勤務を命じられました。めざす医療の充実のため心身医学の必要を感じました。

２００５年（平成17年）からは歯学部で教育および診療に従事しました。赴任当時の川和忠治歯科病院長や宮崎隆歯学部長のご配慮のもとでプライマリケアを基本に、全人的な診療にあたる体制の構築に努めました。ゼロからのスタートで数年は患者さんをどう集めていくか悩みましたが、現在は歯科各科との連携もスムーズになり外来の予約も埋まるようになりました。臨床病理診断学講座の瀧本雅文教授のご厚意で不整脈病理の研究も続けており、退職前年には難関の欧州心臓会議に発表の機会をいただき、よい思い出になりました。

今後は後任の先生達にバトンを渡しますが、歯学部総合内科学ならびに歯科病院内科クリニックへの更なるご援助、ご指導を宜しくお願い致します。また、昭和大学の末永い繁栄をお祈りしております。

地球の健康とすべての人々の
健康で豊かな生活に貢献したい。
それが私たちスズケンの
壮大なテーマです。

Design Your Smile
健康創造のスズケングループ
SUZUKEN
http://www.suzuken.co.jp